

2026 年 6 月 2 日 (火)「チャペル・アワー」

奨励者: 臂 奈津恵

奨励題:「神のなされることはみな その時にかなって美しい」

聖書箇所:コヘレトの言葉 3 章 11 節

新島襄が設立した学校といえば京都の同志社が有名ですが、襄の教育への情熱は地方にも注がれていました。新島襄は故郷の安中で「地方教育論」を演説し、『人間性を正しく育てる本当の教育は地方でこそ行われるべきだ。そこで学んだ人こそが地域を支えるリーダーになる』と訴えました。この考えをもとに東北にも学校を建てましたが、襄の死後、残念ながら廃校になってしまいます。どんなに素晴らしい理念があっても、それを理解し共に実践してくれる「人」がいなければ、教育の灯は消えてしまうのです。

では、新島襄の「地方教育論」が一番素晴らしい形で実を結んだのはどこでしょうか。それこそが、この「新島学園」ではないかと私は考えています。襄の熱い思いを理想で終わらせず、何十年もバトンを繋ぎ続けた人たちがいます。安中教会のリーダーであった湯浅治郎たちの「新島襄先生の故郷にキリスト教主義の学校を」という夢は、息子の湯浅三郎へと引き継がれます。三郎は家業を支えながら父の願いを胸に抱き続け、終戦の年に「この家の財産は、公共のために使え」と遺言して亡くなりました。そして戦後すぐ、その息子の湯浅正次が私財の三分の一を投げ打ち、ついに新島学園は誕生したのです。

このとき初代理事長に就任したのが、湯浅治郎の孫である湯浅八郎です。八郎は同志社大学の総長、国際基督教大学(ICU)の初代学長を歴任、日本のリベラル教育の偉大なリーダーです。そんな人物が新島学園の初代理事長だったのです。八郎が若者に求めたのは、3つの条件を持つ「リベラリスト(自由な人)」の生き方でした。それは、既存の枠に囚われずに自分の頭で考える「批判的思考」、時代の空気に流されず NO と言える「良心」、そして自分と違う他者の尊厳も大切にする「人一人は大切なり」の実践、です。八郎は『新島先生を偶像化してはならない』と常々言っていたそうです。その真意は、「過去の言葉に依存して思考停止してはならない、新島襄のように自由で勇敢なりベラリストになりなさい」という呼びかけです。八郎が晩年に愛した聖書箇所に、「神のなされることはみな その時にかなって美しい」(聖書:コヘレトの言葉 3 章 11 節)という言葉があります。新島襄の情熱、湯浅家三代の祈りと尊い犠牲、そして湯浅八郎のリーダーシップ。これら全てのバトンが、神さまの完璧なタイミングで繋がれたからこそ現在の新島学園があり、私たちはここで出会うことができているのだと思います。

新島学園は、みなさんをマニュアル通りのロボットにする場所ではありません。周りの悪い空気に流されそうなとき、「いや、人一人は大切なものだから」と自分の心で決めて踏みとどまれる、真に自由な人になるための場所です。神さまが備えてくださったこの美しい場所で、自分の頭で考え、自分の足で歩む一步を踏み出していきましょう。